



産大生と地域のかけ橋

# ローカル・リージ

*Local × College*



## 水球のまち柏崎

～まちの人たちと水球のつながり～

横関 健一さんに聞く！ 水泳・水球昔話

ブルボン KZ 元キャプテン 永田 敏さん

## 柏崎で生きる

～地域を元気づける人たち～

I'm fine! プロジェクト 五十嵐 健太さん

似顔絵・デザイン

居酒屋「信」

星野 正晴さん

二口 将信さん



芸術によるまちづくり

野菜によるまちづくり

たかだ 竹あかり

地域の文化を生かした  
《まちづくり》イベント



1980年生まれ。京都市出身。1998年に日本代表選出。筑波大学に入学後、スペインやイタリアなどでプレー。2007年世界選手権出場。帰国後、新潟産業大学で教員を務める。その後ブルボンKZを創設。現在はブルボンKZのGMを務めている。

青柳さんは、小学校3年生の時に京都府立鳥羽高等学校で水球をはじめ、京都府立鳥羽高等学校へ入学し、1998年に水球男子日本代表に選出されました。その後筑波大学へ進み、大学1年を終えました。海外から帰国後、実家には帰らずに日本での水球のレベルが上がればいいなと思って、6、7年間全国各地に自ら水球を教えに行っていました。青柳さんは、「この活動を通じて全国のチーム、練習環境、指導者を把握することづくり」が実現できると思ったのが柏崎でした。

青柳さんは、小学校3年生の時に京都府立鳥羽高等学校で水球をはじめ、京都府立鳥羽高等学校へ入学し、1998年に水球男子日本代表に選出されました。その後筑波大学へ進み、大学1年を終えました。海外から帰国後、実家には帰らずに日本での水球のレベルが上がればいいなと思って、6、7年間全国各地に自ら水球を教えに行っていました。青柳さんは、「この活動を通じて全国のチーム、練習環境、指導者を把握することづくり」が実現できると思ったのが柏崎でした。

## 全国各地で水球指導

**このまちなら絶対に「水球のまち」になる**  
(青柳勧さんの夢物語が現実に)



球のまち」になる、柏崎でできなかつたら全国どこでもできないと確信して水球のチーム作りを始めました。

2010年1月には、活動の支援をお願いするため、ブルボンの吉田康社長に初めて会うことができました。何回か会い、6月ぐらいに正式な返事をいただき、肩の荷があり、ほつとしたポーツでは、支援した企業にとつてメリットが少ないからですが、結果を出せば話題になり、スポンサーに貢献できます。そのために日本1になること、日本代表を柏崎から輩出することが不可欠だと思っていました。

その後、ブルボンから活動資金や選手雇用の協力を得て、社会人チーム「ブルボンウォーターポロクラブ柏崎(ブルボンKZ)」を発足させ、2010年8月に設立発表会が開かれました。このとき青柳さんは、「夢物語が現実になつた瞬間でした。水球にスポーツ選手ですか?」と聞かれ、「何していると思う?」と聞き返すと、「わかりました、水球ですね。」との答えが返っていました。「体が大きいから水球ですか?」というの全国探しても柏崎しかないと思い、このまちなら絶対に「水

柏崎の水球の歴史は1962年に、2年後に開催される新潟国体で優勝するため設立された高校水球から始まりました。2009年には2度目の新潟国体、2012年にはインターハイ、そして2013年には日本選手権が柏崎で開催されることになりました。また、2014年からは全日本ジュニア(U-17)水球競技選手権が柏崎で毎年開催されることになりました。

平成22年に社会人チーム「ブルボンウォーターポロクラブ柏崎(ブルボンKZ)」が発足したことにより、小学生、中学生、高校生、大学生、社会人の全てのカテゴリーが集まりました。これだけのカテゴリーが一地域に集まり結果を残していることは全国的にもめずらしく、注目を集めています。また、2015年にはこれら全てが一体化し、小学生から社会人まで100人を超える水球チームが誕生しました。

ただ単に水球人口が多いだけでなく、柏崎の地域スポーツとして定着したことや、4人のオリンピック選手が柏崎から輩出できたこともあり、「柏崎と言えば?」と聞かれたときに「水球です!」といえるようなまちに着々となつてきています。

# 水球のまち柏崎 ~まちの人たちと水球のつながり~



## 「水球」とは?

水球とは、水上でハンドボールをしているようなイメージで、水面下でも攻防の駆け引きが行われ「水中の格闘技」と呼ばれています。深さ2m以上のプールで、1チーム7人で試合を行い、相手のゴールにボールを投げ入れて得点を競います。1ゴール1点で、ゴールキーパー以外は片手しか使えず、両手を使うと反則になります。ボールを持った選手にはアタック(相手の体に乗って沈めたりすること)をすることができます。試合時間は1ピリオド8分で休憩をはさんで4ピリオドまで行います。

日本における水球の第一人者である青柳勧さんは、モンテネグロから帰国後、日本には社会人水球チームが少なくて、大学卒業後の競技継続の難しい状況を変えようと、新しいチーム設立を考えいました。

そんな中、青柳さんは選手兼監督になり、日本代表経験者や日本選手権出場者を中心に関連から選手を集めました。また、柏崎に本社を置く製造業「ブルボン」とチーム命名権契約を結びました。選手は市内の企業などに勤務しながら競技に参加し、同年の日本選手権予選を圧倒的な力で勝ち抜きました。

2010年7月、青柳さんは選手兼監督になり、日本代表経験者や日本選手権出場者を中心に関連から選手を集めました。また、柏崎に本社を置く製造業「ブルボン」とチーム命名権契約を結びました。選手は市内の企業などに勤務しながら競技に参加し、同年の日本選手権予選を圧倒的な力で勝ち抜きました。

スponサーのブルボンは水球全般も応援する姿勢をとっています。水球男子日本代表「ボセイドン・ジャパン」の公式スponサーにもなっています。

## 日本最大のクラブチーム ブルボンウォーターポロクラブ柏崎

広川先生から声が掛かった頃、柏崎市の居酒屋で飲んでいたところ、アルバイトの若い女の子から「何のスポーツ選手ですか?」と聞かれ、「何していると思う?」と聞き返すと、「わかりました、水球ですね。」との答えが返っていました。「体が大きいから水球ですか?」というの全国探しても柏崎しかないと思い、このまちなら絶対に「水

すが、すぐに柏崎市内で水球への理解が深まるることもなく、練習環境の確保

この記事は『新潟日報』で2016年3月22日から4月13日に連載されていた「夢切り拓いて」をもとに構成しました。

# 横関健一さんに聞く！

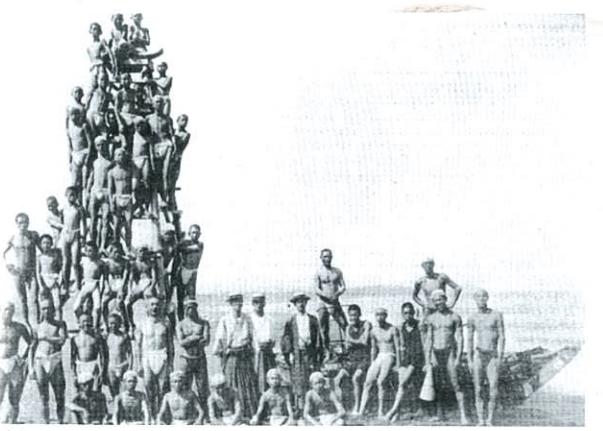
## 水泳・水球昔話

柏崎に住んでいる方は、「水球のまち柏崎」という言葉を一度は耳にしたことがあると思います。ではなぜ、柏崎が水球のまちと呼ばれるようになったかご存じですか？今回、柏崎と水球の関係を知る、柏崎水泳連盟会長、ブルボンウォーターポロクラブ柏崎理事長、横関健一さんにお話を伺つてきました。

### 柏崎の地域活動「海洋少年団」

「柏崎には、昔から水泳に限らず、体育やスポーツが好きな人が多い。陸上競技や野球、テニスなどの普及に熱心に尽力する『変わり者』が多い。」と、横関さんは語り始めます。

横関さんが小学生の頃、地域の小学生が100人以上集まり海で泳ぐ、「柏



昭和3年、日本赤十字社が天屋下に開設した水泳学校。  
『柏崎市史資料集近現代編3下 明治・大正・昭和(写真資料)下巻』柏崎市史編さん委員会編 p.497より

### 崎水泳学校」「海洋少年団」の後身

という地域活動が行われていました。夏休みになると一日中海にいることもあつたようです。横関さんは、「泳ぐことは生活の一部。特別なことじゃないくて自然なこと。」と言われています。なんと柏崎市は、大正14年に柏崎水泳協会を発足させています。会員は小学生が主で、200人ほど集まつたそうです。当たり前のように水泳と親しむ文化が、昔から柏崎にはあつたのです。

### 柏崎から

#### 全国大会決勝へ

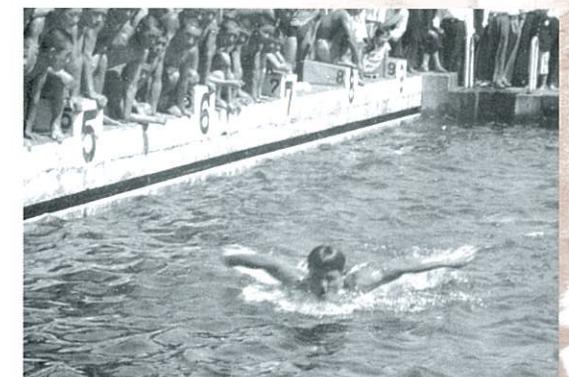
明治39年には、柏崎中学校（現在の柏崎高校）水泳部が設立されました。そして昭和4年、明治神宮体育大会水泳競技大会に柏崎中学校から県代表が2人選出されました。当時、柏崎にはプールがなく、池で練習を行つていた



昭和39年、水球可能公認50mプール「市営海浜公園総合プール」。「選抜高校水球競技大会」の様子。

昭和39年に新潟に一巡目の国体が回つてくると知り、柏崎はとにかく水に関係する競技をやりたい！と志願しました。その結果、水球競技が開催されることが昭和36年に決定しました。これを受けて、水球可能公認50メートルプール「市営海浜公園総合プール」を建設。現在の少年広場に位置する、柏崎2つ目の公認プールです。昭和37

そ�です。穴ヶ入池と徳利池と同いました。そんな環境でしたが、見事決勝まで進出することができました。そのおかげか、昭和9年には、「裏日本初」の公認プール、「八坂プール」が作られました。



昭和29年、飛び込み競技にも対応する「八坂プール」での練習。

### 柏崎高校水泳部水球チーム 日本一の歴史

横関さんは今、柏崎の水球の普及や指導に尽力されている矢島潮子さん、風巻和人さんとともに、柏崎の水球の歴史の編纂作業を行つています。今回の取材では、それらの貴重な資料を多く提供していただきました。完成するのが楽しみですね！

また、横関さんは多彩な趣味があり、インタビューの時もたくさんの鉄道や飛行機の模型を見せていただきました。実際に触らせてもらつたり、動かしたりしていただきました。とてもお元気で明るく、気さくに話をしてくださいました。

横関さんは、「柏崎市は大きな出来事をきっかけに2つもプールを作つてくれた。このことが当時の結果に繋がっていると思う。」と言われていました。

### 2つのプールが結果に繋がる

#### 柏崎の水泳・水球の歴史を編纂中

その中の卒業生の一人、矢島秀三さんは昭和43年メキシコオリンピック、昭和47年ミュンヘンオリンピックにはキャプテンとして出場を果たしました。

昭和39年には、柏崎高校水泳部水球チームは5戦全勝で優勝しました。その後もチームは昭和39年、40年と2年連続のインターハイ優勝という輝かしい結果を残しました。

横関さんは、「柏崎市は大きな出来事をきっかけに2つもプールを作つてくれた。このことが当時の結果に繋がっていると思う。」と言われていました。

横関さんは、「柏崎市は大きな出来事をきっかけに2つもプールを作つてくれた。このことが当時の結果に繋がっていると思う。」と言われていました。

横関さんは、「柏崎市は大きな出来事をきっかけに2つもプールを作つてくれた。このことが当時の結果に繋がっていると思う。」と言われていました。



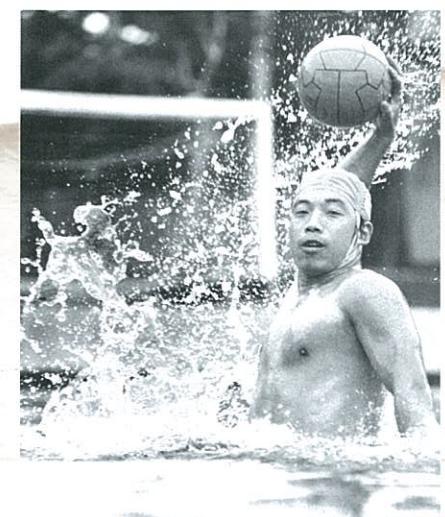
写真手前には横関さんの趣味の電車の模型。  
お話を伺った後の集合写真。



写真手前には横関さんの趣味の電車の模型。  
お話を伺った後の集合写真。



昭和34年、「海洋少年団」の後身「柏崎水泳学校」の集合写真。ボート部もあり、片舷4人で計8人で漕いだ。柏崎小学校のボートが「はやて」で、柏崎第一中学校のボートが「くろしお」という名前だったという。



柏崎高校水泳部水球チームOB 矢島秀三さん。

横関健一さん。1940年生まれ。市内東港町在住。小中学校の教員を経て、現在は柏崎水泳連盟会長、ブルボンウォーターポロクラブ柏崎理事長を務める青柳勧さんでした。



横関健一さん。1940年生まれ。市内東港町在住。小中学校の教員を経て、現在は柏崎水泳連盟会長、ブルボンウォーターポロクラブ柏崎理事長を務める青柳勧さんでした。

## 独占インタビュー!! ブルボンKFC

## フルボンKZ元ギャフテン

福岡県出身の元日本代表で、「トマホーク」<sup>レ</sup>呼ばれ、ブレボンウォーターリー

田敏さんに、柏崎で水球を始めるきっかけや「水球のまち」に対する想いを伺いました。

## 福岡での 水球との出会い

小説との出会い

A portrait of Motoo Ueda, a man with short dark hair, wearing a dark suit jacket over a light-colored sweater and a dark tie. He is seated at a desk, looking slightly to his left. In the background, there is a blue bag with some white and red text or graphics on it.

1981年生まれ。福岡県大牟田市出身  
筑波大学卒業後、2010年からブルボン  
K Zの創設メンバー、元キャブテンと  
て活躍。2015年3月に引退後、現在は  
柏崎市役所勤務

大学4年生の時（新潟国体開催の時期）に柏崎の小学生に指導しにきてほしいと頼まれました。それが永田さんと柏崎をつなぐ最初のきっかけになりました。

大学卒業後は、地元福岡に帰り、一人で練習しながら、日本代表の合宿があるときだけチーム練習をしていました。いう状況でした。しかし、2009年12月、青柳さんが九州に行く用事があり青柳さんから「話したいことがあるから時間作ってくれへんか？」と言われ会うことになりました。その時に青柳さんから「1人で練習していてもレベルが上がるわけがない、オリンピックにいけるようにするためにも新潟でチームを作つて一緒に水球しよう！」

る」と当時を振り返っていました。  
そして、ブルボンウォーターポロクラブ柏崎社会人チームが設立されると、2010年日本選手権に初出場し2012年にはついに日本選手権で優勝することができました。

引退してもなお、  
柏崎に残る熱い想い

永田さんは2015年3月に開催された東日本リーグをもつて引退しましたが、柏崎市役所の職員として働いています。引退してもなお、地元福岡に帰らず柏崎に住んでいるのは、「柏崎の人たちから必要とされているのでできるだけのサポートをしたい。今まで選手としてやってきた時にいろいろ

いがあるからです。そんな永田さんは、「今回のオリンピック出場をきっかけに水球というスポーツがメジャーになつてほしい2020年の東京オリンピックがピックで終わるのではなく、4年後、8年後もオリンピックに出場できるようにならなければいけない」と強化していくほしい。そして、柏崎の水球関係者が行っている小学生水球交流会で水球を教わった子たちが将来日本代表になり、オリンピックに出場してほしい。一度水球をやつたことがある人たちが増えると、水球が柏崎に根づき、柏崎と言えば『水球!』『ブルボンKZ!』となつていけばいいな」と今後の水球界への期待も語りました。



2015年3月に開催された東日本リーグ(現在のJapan Water Polo League)を最後に引退した永田敏さん(写真右から2番目)

## 次世代の選手の育成

## シックに向けて 柏崎市の課題



リオデジヤネイロオリンピックのパブリックビューイングの様子。「まちから」にて。

水泳・水球が好きな  
子どもたちの育成を

ブルボンウォーターポロクラブ柏崎では、試合や練習以外にも小学生水泳授業や小学生水球交流会などの地域活



柏崎で開催される高校生の全国大会「潮風カップ」のポスター。産大の1年生がモデルとなっている。

**水球がまちおこしの  
リーダーシップを！**

青柳さんは2014年から、市と民間で作る「柏崎市シティセールス推進協議会」の運営委員長を務め2016年には柏崎が好きな人ならだれでも入会できる「柏崎ファンクラブ」

学生に水泳、水球の楽しさや喜びを伝えています。水球交流会も同じく2011年度からスタートし、毎年8月に実施されています。この交流会は水球を通して、水泳や水球が好きな子どもたちの育成、水球による地域おこしを目的として行われています。参加人数も年々増えており、2014年度は、市内の小学校から15チーム約140人の児童が参加しました。柏崎では益々水泳や水球に親しむ子どもたちが増え、てきているようです。



小学生指導の様子。柏崎工業高校にて。

「ティセールス」と「水球」は意外な組み合わせに思えますが、関連があると

青柳さんはいいます。「欧洲ではスポーツは地域ぐるみが主流。日本でも少年化の中、各学校の運動部を地域でまとめれば『チーム柏崎』を市民みんなで応援でき、まちおこしになる。ある競技のファンが別の競技のファン

現在柏崎市では、1年間を過して水球が練習できる場所はありません。冬の期間は、プールのある長岡市まで行き、練習を行っています。こうした状況について、横関さんは「選手たちがよりよい成績を出せるように通年練習できる環境を！」と仰っています。かつての「八坂プール」や「市営海浜公園総合プール」での成果をみてきた横関さんならではの意見だと思います。

ブルボンウォーターポロクラブ柏崎の冬季練習の問題は、東京オリンピックに向けての課題になりそうです。

ブルボンウォーターポロクラブ柏崎では、試合や練習以外にも小学生水泳授業や小学生水球交流会などの地域活動を積極的に行ってています。

授業に

# 柏崎で生きる ～地域を元気づける人たち～

今日、東京一極集中が問題になり、地方創生が喫緊の課題である中、私たちは地方で頑張り輝いてる人に魅力を感じ、取材させてもらいました。ここで紹介する3人は、柏崎で生まれた20～40代の方です。一度関東に進学や就職をして、自分の夢やスキルを磨き、その後Uターンして、夢の実現のために、また、柏崎を盛り上げようと活動している方々です。そこから私たちは、柏崎で活動する楽しさを学びました。ここでは、その方たちの活動や経験、思いを記事にしました。



# I'm fine!

## 地域人①

### 五十嵐 健太 (イガケン)さん

五十嵐健太さんは、「I'm fine! プロジェクト」を立ち上げ、さまざまなイベントを柏崎で行っている方です。

「I'm fine! プロジェクト」とは、「運動実施者100%運動で文化的な笑顔溢れる元気いっぱいのコミュニティを作ります」というスローガンのもと事業を展開しています。事業は、

- ①スポーツイベント事業
- ②スポーツサークル管理事業
- ③運動指導事業
- ④夢と絆の事業（社会貢献事業）の4つです。

## I'm fine! プロジェクトって何？

①は、バーベキューやヨガなどのアクティビティなものにリーズナブルな料金で参加できるイベントなどを企画しています。

②は、月1ボーリング、健

全麻雀、カラオケ部、テニス

イガケンさんは、柏崎から出ていくときに「10年たつたら柏崎に帰ってきてほしい」と決めていました。柏崎が大好きなので、生まれ育った地元で仕事がしたかったので、こう決めていたそうです。そして一昨年に10年目を迎え、自分のスキル、人脈を育てて、柏崎に帰っていました。

横浜でもトレーナーとして活動していましたが、フリートレーナー1本でやっていくにはなかなか難しく、フリートレーナー3割、掛け持ちのバイト7割でなんとかぎりぎりの生活をしていました。

いきなり横浜に出たため、知り合いもいなく、すごくさみしくて孤独で、孤独というものに恐怖を抱き始めました。その恐怖から「認知行動療法」といううつ病の人に対する心理学を学び、その一環で自分でコミュニケーションを動かす行動に出で、「やりたいサークルがないなら自分で作ろう」と思い、バレーボールのサークルを作りました。これが「I'm fine!」の始まりになりました。

### イガケンさんに 聞いてみた！

#### 今の若者に求めることは？

柏崎のイベントなどに出てきてほしい。一步踏み出す、チャレンジする。行動起こしてほしい。圧倒的に今の若者は鈍いから。柏崎は、家庭に入つ

ても出られるような環境を家族間で作ってほしい。家庭に入つていいようがないからどうが、一步、踏み込んでほしい。人生であつてほしい。

健康で文化的な笑顔あふれるまちを作りたいから。体を動かして健康で、文化的っていうのは、いろんなことに興味を持つて活動すること。そういったことをすれば自然と笑顔になるから。こんなふうに生きてほしいな。

人生であつてほしい。

「ゆるすぽ」は、スポーツを本気でやるのが目的ではなく、みんなで楽しむ活動し、そこで友人を見つけたり、同じ趣味の人を見つけたりしてもらうサークルです。月1で活動していますが、毎回何のスポーツをするかなどは、参加者で決めています。この部分などまさに「ゆるい」感じが出ていると思います。



イベントに参加してきました！！  
イガケンさんが企画している「ゆるすぽ」に私たちも参加してきました。アットホームな雰囲気で、とても楽しかったです！



1983年3月24日生まれ。南中学校卒業。柏崎工業高校卒業、長岡の専門学校へ進学。その後10年関東へ。現在は、柏新時報社に勤めながら、スポーツトレーナーをしている。



## イベント・活動紹介

流行の「PPAP」の似顔絵も描いています。とてもポップでかわいいピコ太郎ですね。



宝石ミノワのブライダルフェアで150枚の似顔絵を描きました。宝石ミノワの社長とパシャリ！



### 星野さん

柏崎の商店街に並べられた「絵行燈」も描きました。「鳴かぬなら 私が鳴ましよう ホトギス」かわいい絵でほっこりする絵ですね！

彼らは、できればずっと地元に残つてみたいと考え、中学校時代の友人をいつまでも大切にします。親と仲がよいのもそうした地元志向のあらわれです。少子化が進んでいる今日ですが、結婚が早い傾向があり、子どもを産み地元で子育てする人も多く、地元が大好きなのでそこにマイホームを建てたいと思っている人も多いのが特徴です。また、若者の「車離れ」が指摘されるなかで、車にも興味を持つっています。その中でもスポーツカーなどではなく、ミニバンなどの大人数で乗れるような車を好む傾向があります。実家暮らしで金銭面での余裕があれば財布の紐も緩みますし、マイルドヤンキーが現代の地域経済に一定の役割を果たしているのは確かだと言えましょう。

「これからもずっと

そしてもつと柏崎」

先ほど策定された「柏崎市第五次総合計画」は、「柏崎市市民参加のまちづくり基本条例」に基づき、広範な市民の参

加を得ながら策定され、柏崎市行政計画の最上位計画として位置づけられています。平成29年度から平成38年度までの10年間で、大きな課題である「人口減少・少子高齢化の同時進行への対応」を各分野における共通の課題として捉えていました。これらに対応するため「子どもたちがまちへの誇りと愛着を持つ」「若い世代や女性から選ばれる」「高齢者がいきいきと暮らす」の3つの戦略的視点から、分野別に取り組むべきテーマを決めています。柏崎市の将来都市像を「力強く心地よいまち」、キャッチフレーズを「これからもずっと そしてもつと柏崎」と決定し、将来都市像の実現にあたって、行政から市民をはじめ、地域や団体、企業などさまざまな主体に協力や連携を働きかけていきます。柏崎市これから10年、子どもたちや若者の地域への愛着と彼らの活躍が、益々、地域活性化の鍵となっていくでしょう。

昨年12月には、市内に「柏崎U・Iターン情報プラザ※」が開設されました。若者の「地元の柏崎に戻つて働くことかな、魅力ある地方での暮らしを始めたいな」という想いをサポートする施設です。市内の企業が優秀なスキルを持つ人材が欲しい、同時に柏崎の魅力を知つてもらえばと思ひます。

※ 柏崎U・Iターン情報プラザ 〒945-0055 柏崎市駅前2-1-57 小竹ビル1階（イトヨーカドー丸大柏崎向かい）  
TEL: 0257-47-7333 開館時間：AM10:00～PM6:00 休館日：毎週火曜日

### イガケンさん

運動実施者100%!! I'm fine! プロジェクト  
様々な活動の案内や申し込みはHPから  
お願いします。  
<http://amfine.buyshop.jp/>

—青春が止まない。—

i love fine!

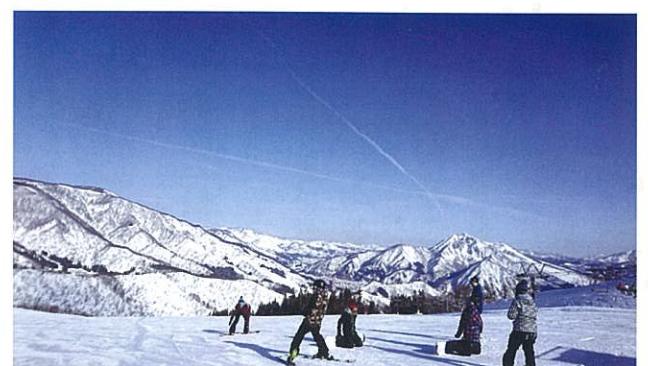
運動実施者100%!!

各種スポーツイベント  
多種目スポーツサークル ゆるすぼ

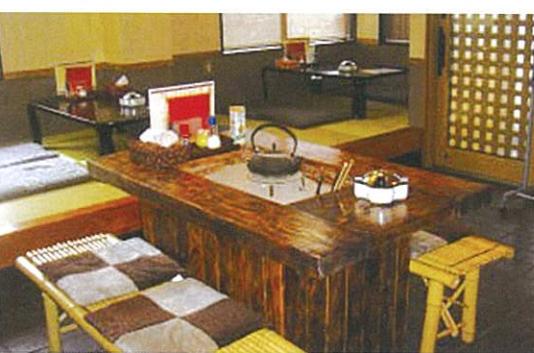
健康で文化的な笑顔あふれる元気いっぱいのまちづくり



これはスポーツイベント事業の1つの「満月の波音の癒しのヨガ」の活動中の様子です。



「雪山トリップ」という皆でスキー やスノボを楽しむイベントです。大人数で青空の下で楽しむのは、気持ちよさそうですね！



居酒屋「信」さんは、和食を中心地物の魚や良い食材を選び、提供しています。お一人様から、大人数の宴会なども出来ます。店内は、囲炉裏のテーブル席があり、とてもくつろげる雰囲気になっています。

〒945-0832 新潟県柏崎市関町2-29  
TEL: 0257-22-3241



### 二口さん

取材・文・デザイン：高橋桃花・増田泰大

# 芸術によるまちづくり

今、多くの地域で「まちづくり」の取り組みが進んでいます。元気のなくなった地域の活性化が求められているからです。環境や福祉、防災などによるまちづくりがある中で「文化によるまちづくり」とくに「芸術によるまちづくり」は、関わる人たちの「楽しさ」が大きな原動力になります。この「楽しいまちづくり」を柏崎にさぐってみました。

## ふるさとまつり 絵あんどん展 （夏の風物詩）

柏崎の「ふるさとまつり・絵あんどん展」は、帰省された方や海水浴客などに、真夏の柏崎を楽しんでもらい、商店街にも来てもらおうと始まりました。今年で35年目を迎えます。近隣の3商店街が共同で主催しています。

「あんどん」は、今の若い方には、なじみがないかもしませんが、昔の照明器具です。木製の直方体の枠に和紙をはり、その中に油を入れた皿を置いて火をともして使うものです。

この「あんどん」の形をまねて、和紙に「絵」や「書」を書いて8月の最初の土・日曜日に展示をするのです。夜になると、明かりがほんのりと灯り、一段と風情が増します。絵や書は、市内外から寄せられたプロの作家を開設しました。



「大字体验」制作風景



「ふるさとまつり・絵あんどん展」の風景

の作品もあれば、趣味で書かれている方の作品もあります。今年は、116点の作品が寄せられました。中学、高校の美術部、高校書道部の生徒作品も、111点が、本町中心に位置する複合

施設・フォンジエ地下に展示されました。高生作品は、対象外（入札方式のチャリティー販売で、千円から最高三万円で、手に入る事が出来ます。人気の作家の作品は、最高額を入札しても抽選になるほどです。

観る側にとつては楽しみですが、実行委員会の方々は、作品を展示するまでに、大変な手間がかかっています。先ず、作品を依頼するため、商店街の委員自ら家を訪ねて、和紙を手渡してお願いに回ります。そして、回収。こうした努力は、商店街の方々と市民とを結びつけることに、繋がります。また、中高生の作品を展示する事で、その家族がみんなで商店街へ観に来かけます。こうして、この芸術振興の行事は心豊かな故郷づくりの役割を担っているのです。「あんどん」が繋ぐまちづくりは、ほんわり心があたたかい。

## 産大「書道部」の活動

この「ふるさとまつり・絵あんどん展」には、新潟産業大学の「書道部」も4年前から出品をしています。部員

している市内のサテライト施設「まちかど研究室」（通称「まち研」「本町二コニコ通り」）を拠点としても、短期の企画事業や季節行事を取り入れて、地域の講座等の企画を実施しています。新潟産業大学は、地域とのつながり、活性化を念頭において活動をし、今後も地域住民の方々との交流で、まちを元気にして行きます。

また、書道部の活動にもとづれば、今年「書道とふれあいの会」を立ち上げて、学内はもとより、市民の方々との文化交流を行っています。「まち研」を利用して、毎週第2・4金曜日3時半から活動をしています。10月には、「季節のポストカードづくり」を市民向け講座として開催しました。11月にて、学内で大きな字を書く「大字体验」を実施しました。これからも、書道を通じて、多くの方とふれあいたいです。

## 書道とふれあいの会 「まちかど研究室」にて市民と交流

が中心でしたが、十年前の中央教育審議会において「社会貢献」が大学の第三の使命であると位置づけられました。それ以降、「教育、研究、地域貢献」を三つの柱として、多くの大学が地域との連携を重視するようになりました。国も、大学の活性化による地域活性化を「地域創生」の柱の一つに据えています。また地域の側も積極的に大学を活用し、地域で学び、地域に愛着を持ち、地域に根付く人材を育成することを推進するようになりました。

地域行事での連携も増えています。その例のひとつが今年で三年目になる「たかだ竹あかり」です。高田コミセンと、私の所属する梅澤・権田ゼミが連携して新道地区の方々との協力のもと、荒れた竹林を整備し、伐採した竹を活用して、竹灯籠をつくり、夜の「飯塚邸」を竹あかりでてらす行事

です。さらに、今では消えかけていた「月待ち」の行事「二十三夜待」を復活する事で、より文化的な行事になりました。地域住民では、なかなか気づかない地域の良さや伝統的な文化を発掘して、見事に文化的な地域行事「たかだ竹あかり」が行われたのです。これは、柏崎を代表する行事のひとつとして、広く市民にも周知されるようになつて来ました。

また、新潟工科大学と共同して運営



「まちかど研究室」での制作風景



布絵・書の参考作品をお手本に制作します

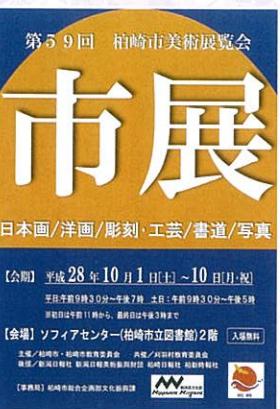


新潟産業大学「書道部」活動風景

柏崎市美術展覧会

「きは一相崎市美術展覧会」はつい平成29年で60回を迎えます。「新潟県美術展覧会」に次ぐ、県内では2番目に歴史のある展覧会です。第1回の「市展」が開催された昭和32年11月16日は終戦から10余年、物不足も解消されておらず、世情も必ずしも安定したとは言えない時代でした。そのような中にあつても、高い志をかかげた方々の作品100点が展示され、開催されました。

現在「一市展」では美術の分野を日本画・洋画・彫刻・工芸・書道・写真の6部門に分けて公募がされています。展示会場は、第1回目は、柏崎商工会議所と柏崎信用金庫でしたが、年を重ねて行くうちに、出品点数も増え



第59回「市展」ポスター

く建て替えられた市立図書館「ソフィアセンター」が新会場となりました。第59回の市展では、応募点数372点、応募者数317人と、多くの市民の方々からの応募がありました。

この市展では、各部門ごとに、市展賞・奨励賞・新潟日報美術振興賞が、節目の年には記念賞が授与されます。出品者は大賞受賞を目指にし、また委嘱作家を目指します。委嘱作家になるためには、市展賞もしくは、記念賞を含み5回の入賞をしなくてはなりません。もちろん、出品者は、毎年良い作品を市民の方々に観て頂こうと、日々研鑽されています。柏崎市にとって「市展」は、美を追求する作者と、その作品を通して心の安らぎを求める市民の交流の場となっています。これからさらに60年、70年と、柏崎市美術展覧会がつづき、ますます発展することを！

最後に、柏崎の芸術・文化活動を支えている「柏崎美術会」についてお話をします。柏崎美術会は、昭和54年に設立されました。現在会員数は、59名。会員となるための条件は、美術が子供

美術からの復興

未来につなぐ

柏崎市には、市の教育委員会が主催する「市展」があり、民間では市の中でも、芸術愛好家であれば、大歓迎ですしかし、会員の中には、中央の美術展覧会へ出品して、活躍している方もあります。

柏崎美術会では、美術活動を通じて柏崎の未来を担う人材育成にも貢献したいと常々考えていました。そこで平成27年度より新規事業として、「クレヨン寄贈」を始めました。会員からの会費の一部を使いながら、クレヨンや画材等を購入して、市内の保育園幼稚園から毎年2園を選んで届けると

## 未来につなぐ

いう事業です。この事業実施の目的は幼い頃に自由にたくさん絵を描いて欲しいという事です。幼児期は手が器用に使えるようになる時期です。そして無心に描く事が出来る時期でもあります。この大切な幼児期を、会員一同は応援したいという願いからこの事業を始めました。できる所から、気付いた人から実行する事で、社会がより良い方向に導かれて行く事に願いを込めて、



「柏崎美術会」会報

取材・文・デザイン：宮嶋美恵子

## 野菜によるまちづくり

日本の主食は米で、野菜は副食の一部ですが、この野菜で「まちづくり」ができないか、挑戦してみるとしました。

野菜とは何か

野菜は毎日食べている食物で野菜とは何かと考えたことはありません。『広辞苑』には「生食または調理して、主に副食用とする草本食物の総称」となつていて抽象的です。『明鏡国語辞典』には「食用として畑などで栽培される食物の総称」となつていてより具体的です。「主食」はお米やパンなど穀類でそれ以外が副食でおかずになります。草本とは一般的には草のことですが、時代とともに畑で野菜が栽培されれるようになつてきました。

いろいろ調べてみると、日本に自生の野菜はヤマウド、ミツバ、セリ、フキミヨウガなど数種類のようです。縄文

時代の青森県三内丸山遺跡からはすでにヒヨウタン、ゴボウ、マメなどの栽培植物が出土しています。奈良時代から平安時代には、カブ、ダイコン、シ

## 社会人学生として

私は団塊世代（1947年から）

無農薬、有機栽培で  
差別化

1949年に生まれの人)の社会人学生です。憧れの東京で青春時代を過ごし、柏崎にUターンしてからも、がむしゃらに働いてきました。20世紀は戦争の世紀であり、環境破壊の世紀でもありました。21世紀は期待と不安を抱きながら歴史的大転換の「時」です。西暦を1000年単位で区切ったミレニアムの「時」でもあります。ここで何かの歴史的転換を考えたとき、車やテレビ、電話などのなかつた時代を思い起こします。

無農薬、有機栽培で差別化

えぼトマトはガンのリスクを下げる虫垂炎を予防するなどです。私の地域では男は稻作、女は畑作が定着していました。畑仕事を母親から教わりましたが農薬、化学肥料を使つた農法でした。高齢になり完全に引き継ぐことになりました。

種から育てれば野菜と会話できるのではないかと思い、ハウスをつくりました。スイカを種から育てても何の問題もなく大きなスイカが採れました。採れすぎてスイカ糖をつくつたことがあります。8時間もコンロで煮詰め水分を飛ばします。

無農薬、有機栽培の仲間に巡り合え

その白奇ノレギー人材セミナー農業

定年後、自然農法に興味を持った「パーマカルチャ」（オーストラリアのビル・モリソンとデビット・ホルグレンが構築した人間にとつての恒久的持続可能な環境を作り出すためのデザイン体系）の講習を柏崎で受けてきました。安曇野で実践している白井二氏が講師でした。他方栄養学の研究がすすむにつれて、毎日の食事的重要性が明らかになってきています。ジョン・パークーの著書『食べるクスリ』はカボチャやイチゴ、キヤベツ、トマト等々の効能が説明されています。（例

支援事業の「みんなの農場」グループです。ここで私は、新しい野菜の栽培方法を教わりました。もうひとつグループは無農薬・有機ネットを立ち上げた「四季彩」です。

両グループともスーパー等で販売をしていました。差別化した野菜のみを販売する方法はないか相談を受けました。スーパーには地元野菜コーナーを設けているところもありますが、全部が無農薬で有機かどうかわかりません。善意で貸してくれる場所などあるのでしょうか?。



④ 柏崎駅前ニコニコ通り商店街  
人通りがほとんどありませんが明るくお客様を待ちます。  
開店は毎週土曜日の13時30分から2時間です。しかし固定客がつくようになってから1時間で十分なことがわかりました。自分のほしい野菜を確保するために並ぶようになったからです。

外国人の方はとにかく元気がいいです。ゴーヤがガンに効くと言つて買って行きました。

## スロー・ライフが やさしい人生

スローライフとは、生活様式に関する思想の一つで、ファストフードに対して唱えられたスローフードのもとにある考え方です。日本では2001年頃から使われ始めました。「ゆったり、ゆったり、（心）ゆたかに」を唱えています。

昔、「せまい日本そんなに急いでどこへ行く」という標語がありました。最近、「今の日本の若者は物が無い時代の若者よりも幸せなのか?」と、世界一貧しいウルグアイ前大統領ホセ・ムヒカ氏が日本に来日したときに聞いた

かけられた言葉に考えさせられました。大量生産・大量消費の高速型ライフスタイルに対して、ゆっくりした暮らし。  
しかし21世紀には必要かもしれません。地産地消や歩行型社会を目指し、地元で採れた新鮮な野菜で元気な長寿を実現したいと思います。私の畑の脇道は犬の散歩コースです。通り過ぎる人に畑をしませんかと呼びかけてみました。が畑を持つていな人は借りてまでやりません。マンション住まいも無理です。畑を持つている人は自分に合ったやり方で小さな行動を起こすことから「まちづくり」の卵を産むことができることを確信しました。ひいては循環型社会になることを望んでいます。



⑤ 産大に余った野菜を持  
テーブルを用意してもらい、延  
べ19回運びました。



学生の皆さんからはたいへん喜ばれました。柏崎には大学が二つあります、余った野菜の無償提供の輪を広めたいと考えています。



取材・文・デザイン：植木敏郎

300 n

A map of a town center area featuring several landmarks: 柏崎駅前 (Kashiwazaki Station), 新潟工科大学 (Niigata College of Technology), 駒場所 (Koma-no-jo), 文化会館 (Culture Hall), and 守りを兼ります。」の移動 (Shiritori o konnaru). A green line highlights a route from the station through the town. A blue box labeled '野菜販売' (Vegetable Sales) indicates the location of a stall. The number '2' is circled in the top right corner of the map area.

② 柏崎シルバー人材センター  
農業支援事業「みんなの農場」

畑は春日（砂地）と橋場（粘土質）にあります。面積は広大です。数人の専従と数十人のボランティアで勉強しながら栽培しています。人材センターでは無人販売も始めました。

平成 28 年の閉店案内  
開店は 7 月 16 日から 12 月 3 日までの間で 19  
回店を開きました。  
売上総額 95,330 円で、1 回当たり 5,017 円で  
した。東京の娘夫婦に柏崎野菜を食べさせたい  
と大量に購入する方もいました。重い野菜を家  
まで配達したことなど何回かあります。来年は野  
菜が採れる 5 月頃から開店したいと思ってい  
ます。

「みんなの農場」と「四季彩」の二つのグループの差別化した野菜のみを販売する場所を探すことにしました。柏崎駅前二コ二コ通り商店街にありました。ここは、新潟産業大学（略して産大）と新潟工科大学が市の連携事業として設立した「まちかど研究室」です。アーケード下にテーブルを2脚並べ、野菜の販売を始めました（私の植木ファームの野菜は家族六人で消費する量で販売するほどありません）。

「無農薬栽培」、「有機栽培」、「地元野菜」の旗を購入してPRに努めました。私のことのところは駅前が賑わっていました。ところが昨今、土曜日の午後は柏崎駅前でもほとんど人が歩い

ていません。そこでフリーのお客を待つていても仕方ないのでチラシをつくり商店街にポステイングしました。継続は力なりで一週間に一回ですが回数を重ねるごとに固定客が増え、賑わうようになつてきました。この小さな賑わいが「まちづくり」の卵と考えます。

① 植木ファーム  
写真の面積は約 120 坪です。毎朝 6 時 40 分から 1 時間畑を管理しています。産大と駅前までの距離は約 4 km です。

はたくさん採れて6人家族の消費量をオバーしまして。余りは近所に配ったり大量に運びました。

アイコンの移植はご法度に  
なっていますが、理由がわ  
からないのでポットで播種  
して移植してみました。時  
には遊び心も必要です。

### ③ 無農薬・有機ネット 「四季彩」

安田地区以外に小国や高柳の方も参加した十数人のグループです。忘年会は病虫害の話題で盛り上がっていました。



ボカシ肥料を作成中。耕運機で攪拌しているところです。材料は米ぬか、菜種粕、魚粉、骨粉、発酵剣糞、燻炭、発酵材です。

A photograph showing a man in a white lab coat and a white hard hat standing next to a small concrete structure in a rice field. He is holding a microphone and a small electronic device, possibly a sensor or a data logger. The background shows a lush green rice paddy.



**出 信** 自然農法の研修に埼玉県まで行つてきました。土が野菜に適している環境でした。雪が降らないのがうらやましいです。

# たかだ 竹あかり

## 地域の文化を生かした《まちづくり》イベント

柏崎の文化財「飯塚邸」の広い庭園を2000本の竹灯籠で照らし、月をめぐる古くからの行事「二十三夜待」にちなんで、文化による《まちづくり》に挑戦しました。



そんなとき、高田コミニティ振興協議会（以下「コミニセン」）から、竹灯籠のイベントをしたいのでお手伝いしてほしいという一報が入りました。コミニセンでは、地域に点在する竹林が高齢化で世話ををする人がいなくなり荒れているので、竹の伐採と有効利用を考えて竹灯籠のイベントを発案したのです。

私たちは早速、飯塚邸を会場にしようと提案しました。コミニセンは当初コミニティーセンターの敷地内を会場に考えていましたが、私たちの提案により2会場で行うことになりました。私たちは飯塚邸会場の担当です。では、どんなイベントにするか、どうしたら魅力的なイベントになるのか考えました。

私たちのゼミは高田コミニセンと5年以上の連携関係があります。《まちづくり》のお手伝いをすると同時に、

日没頃の点火終了を目指して、およそ2000本の灯籠を、アクセスの道路から飯塚邸まで、そして飯塚邸の玄関から庭園にかけて設計図に基づいて並べます。灯籠の斜めに切った面の方向が揃うように、また必ずしも平らでない場所で倒れないようバランスをとりながら立っていくのも大変です。その後点火しますが、中に入れたロウソクの芯をしっかりと伸ばして、ちゃんと灯つたか確かめながら中腰で行う作業もまた一苦労です。地域の人たちと学生たちが手分けして行いました。

全てに点灯した頃、辺りは暗くなり、竹あかりは美しく輝き始めました。観客も訪れ始めました。庭を歩きながら、また座敷の縁先に座って、灯りを楽しむことができます。少し暗い奥庭には提灯を持つて散策するコースを作り、子供たちばかりでなく大人にも人気になりました。抹茶のサービス（有料）や小豆粥の振る舞い（無料）もしました。小豆粥は柏崎の古い資料に「二十三夜待」で食されるとあったからです。小豆粥は100食の限定だったため、すぐになくなってしまい「食べたかったのに」などと声がもれるほど人気でした。また音楽の演奏も企画しました。ボランティアで市民の演奏家にお願いし

ました。新潟産業大学に隣接する柏崎市高田地区には、市の史跡「飯塚邸」があります。大学で文化経済学を専攻し、「文化による《まちづくり》」を学んでいる私たち梅澤・権田ゼミナールは、この「飯塚邸」を舞台にして何か《まちづくり》のイベントをしたいと思つていました。

そんなとき、高田コミニティ振興協議会（以下「コミニセン」）から、竹灯籠のイベントをしたいのでお手伝いしてほしいという一報が入りました。コミニセンでは、地域に点在する竹林が高齢化で世話ををする人がいなくなり荒れているので、竹の伐採と有効利用を考えて竹灯籠のイベントを発案したのです。

私たちは早速、飯塚邸を会場にしようと提案しました。コミニセンは当初コミニティーセンターの敷地内を会場に考えていましたが、私たちの提案により2会場で行うことになりました。私たちは飯塚邸会場の担当です。では、どんなイベントにするか、どうしたら魅力的なイベントになるのか考えました。

私たちのゼミは高田コミニセンと5年以上の連携関係があります。《まちづくり》のお手伝いをすると同時に、

日没頃の点火終了を目指して、およそ2000本の灯籠を、アクセスの道路から飯塚邸まで、そして飯塚邸の玄関から庭園にかけて設計図に基づいて並べます。灯籠の斜めに切った面の方向が揃うように、また必ずしも平らでない場所で倒れないようバランスをとりながら立っていくのも大変です。その後点火しますが、中に入れたロウソクの芯をしっかりと伸ばして、ちゃんと灯つたか確かめながら中腰で行う作業もまた一苦労です。地域の人たちと学生たちが手分けして行いました。

全てに点灯した頃、辺りは暗くなり、竹あかりは美しく輝き始めました。観客も訪れ始めました。庭を歩きながら、また座敷の縁先に座って、灯りを楽しむことができます。少し暗い奥庭には提灯を持つて散策するコースを作り、子供たちばかりでなく大人にも人気になりました。抹茶のサービス（有料）や小豆粥の振る舞い（無料）もしました。小豆粥は柏崎の古い資料に「二十三夜待」で食されるとあったからです。小豆粥は100食の限定だったため、すぐになくなってしまい「食べたかったのに」などと声がもれるほど人気でした。また音楽の演奏も企画しました。ボランティアで市民の演奏家にお願いし

ました。新潟産業大学に隣接する柏崎市高田地区には、市の史跡「飯塚邸」があります。大学で文化経済学を専攻し、「文化による《まちづくり》」を学んでいる私たち梅澤・権田ゼミナールは、この「飯塚邸」を舞台にして何か《まちづくり》のイベントをしたいと思つていました。

そんなとき、高田コミニティ振興協議会（以下「コミニセン」）から、竹灯籠のイベントをしたいのでお手伝いしてほしいという一報が入りました。コミニセンでは、地域に点在する竹林が高齢化で世話ををする人がいなくなり荒れているので、竹の伐採と有効利用を考えて竹灯籠のイベントを発案したのです。

私たちは早速、飯塚邸を会場にしようと提案しました。コミニセンは当初コミニティーセンターの敷地内を会場に考えていましたが、私たちの提案により2会場で行うことになりました。私たちは飯塚邸会場の担当です。では、どんなイベントにするか、どうしたら魅力的なイベントになるのか考えました。

私たちのゼミは高田コミニセンと5年以上の連携関係があります。《まちづくり》のお手伝いをすると同時に、

（平凡社）によると、一定の月齢の夜に月の出を待つてこれを祀る行事で、月齢23日の月を祀る「二十三夜待」が最も古く、16世紀頃に京都の公家社会で行われていたそうです。この「二十三夜待」が庶民にも広がり、江戸時代には村の「講」（ちょっと強制的な地域の仲良しグループ）が主催していました。私たちは昔の行事にあやかつて、竹灯籠のイベントを旧暦23日（つまり二十三夜）に行う提案をし、実現することになりました。

「月待の行事」とは、『世界宗教事典』（平凡社）によると、一定の月齢の夜に月の出を待つてこれを祀る行事で、月齢23日の月を祀る「二十三夜待」がありました。地域を歩いていると、所々に「二十三夜塔」という石碑があり、調べるとかつて「二十三夜待」という「月待の行事」があつたことがわかりました。

（平凡社）によると、一定の月齢の夜に月の出を待つてこれを祀る行事で、月齢23日の月を祀る「二十三夜待」が最も古く、16世紀頃に京都の公家社会で行われていたそうです。この「二十三夜待」が庶民にも広がり、江戸時代には村の「講」（ちょっと強制的な地域の仲良しグループ）が主催していました。私たちは昔の行事にあやかつて、竹灯籠のイベントを旧暦23日（つまり二十三夜）に行う提案をし、実現することになりました。

「月待の行事」とは、『世界宗教事典』（平凡社）によると、一定の月齢の夜に月の出を待つてこれを祀る行事で、月齢23日の月を祀る「二十三夜待」がありました。地域を歩いていると、所々に「二十三夜塔」という石碑があり、調べるとかつて「二十三夜待」という「月待の行事」があつたことがわかりました。

（平凡社）によると、一定の月齢の夜に月の出を待つてこれを祀る行事で、月齢23日の月を祀る「二十三夜待」が最も古く、16世紀頃に京都の公家社会で行われていたそうです。この「二十三夜待」が庶民にも広がり、江戸時代には村の「講」（ちょっと強制的な地域の仲良しグループ）が主催していました。私たちは昔の行事にあやかつて、竹灯籠のイベントを旧暦23日（つまり二十三夜）に行う提案をし、実現することになりました。

（平凡社）によると、一定の月齢の夜に月の出を待つてこれを祀る行事で、月齢23日の月を祀る「二十三夜待」が最も古く、16世紀頃に京都の公家社会で行われていたそうです。この「二十三夜待」が庶民にも広がり、江戸時代には村の「講」（ちょっと強制的な地域の仲良しグループ）が主催していました。私たちは昔の行事にあやかつて、竹灯籠のイベントを旧暦23日（つまり二十三夜）に行う提案をし、実現することになりました。

## イベント当日の様子

二十三夜待について詳しく説明する前に、昨年（3回目）の「たかだ竹あかり」の飯塚邸会場の様子をお話します。日程は旧暦23日に最も近い土・日の9月24日と25日になりました。

写真と俳句のコンテストも行われ、園内でカメラを構え、構図を工夫して撮影する人の姿があちこちに見られました。指を折つて俳句をひねつている人は見掛けませんでしたが。応募作品の審査は、写真の部は産業大学の写真部、俳句は学長の国語学者北原保雄先生が行い、後日コミニセンで表彰式をしました。観客の案内は学生たちが担当しました。蚊除けのスプレーをして、玄関でチラシを渡したり、庭の中を誘導したりしました。また屋内でも地域のおかさんたちと一緒に小豆粥を振舞つたり、あるいは他のゼミの地域貢献活動に関わるグッズを販売したりと頑張りました。

地域のさまざまな文化的財についてもいろいろ調査し勉強していました。そ

うした蓄積の中に「二十三夜待」があり、あるいは他のゼミの地域貢献活動

## 二十三夜待とは

飯塚邸の座敷には、かつて高田地区の「二十三夜待」で飾ったと記録に残っている掛け軸を、産業大学書道部を指導していらっしゃる先生に再現してもらい、飾りました。それは「奉斎祀月夜見大神」と書かれたもので、「月読みの大神」とは、日本神話の中心の神、天照大神（太陽神）の弟の月神です。まさに「二十三夜待」の信仰対象です。

しかし、神道の神様だけでなく、仏教の仏様も「二十三夜待」の信仰対象になっています。それが勢至菩薩といふ仏様です。とくに「二十三夜の仏様」です。勢至菩薩はあまり有名ではありませんが、よく知られた阿弥陀如来の両脇に控える仏様の一人です。もう一人は有名な觀世音菩薩（觀音様）です。一般に觀音様が阿弥陀様の慈悲を表し、勢至菩薩が智慧を表すそうですが、勢至菩薩はまた月の化身とも言われることから「二十三夜待」の仏様となっているようです。やはり「勢至菩薩」と書かれた掛け軸を飾つたという記録があります。

かつて、村の講で行われた「二十三夜



## 飯塚邸

最後に「飯塚邸」についてお話しします。飯塚邸は、江戸時代から太平洋戦争の終戦まで大地主としてこの地域を治め、また慕われた飯塚家の邸宅で、江戸時代の終わり頃につくられ、その後何度も改修された伝統的な日本家屋です。太平洋戦争後、昭和天皇が全国巡幸の折にこの飯塚邸に2泊され、池泉回遊式の庭園が「秋幸苑」の名を賜つたこともあり、1973（昭和49）年、柏崎市の史跡になりました。

## みんなの声

こうした伝統的な場所で、かつての文化的な行事「二十三夜待」の今日的な復活をめざした「たかだ竹あかり」を企画運営して成功させました。訪れた観客は一日間で延べ2118人でした。多くが柏崎市内からでしたが、長岡市や上越市からいらっしゃる方も、3年目を迎えてきました。長く続けて柏崎の「文化行事」として定着させて欲しいという声や、また自分たちの町内やコミセンでも竹あかりのイベントをしたいので灯籠を貸して欲しいという声もあります。イベントに参画した学生たちの声も聞いてください。

「3年目を無事に終え、だんだんと地域に定着してきたこの秋のイベント

入り口には両翼に大きな蔵のついた長屋門があり、中に進むと主屋がひかれています。座敷に入る手前に囲炉裏のある部屋があり、座敷からは秋幸苑が見渡せます。奥には茶室があり、また反対側には天皇の行在所となつた新座敷があります。最も奥には新しい茶室棟と古い大きな裏土蔵が建っています。建物の面積は延べ1500平方メートルほどです。

「二十三夜待」をどうか絶やすことなく続けていきたいと思います。」「1年の中のたつた2日間のために、多くの人が同じ目標に向かって協力する『たかだ竹あかり』はとても素晴らしい柏崎のイベントだと感じることができました。」「自分が住んでいる地域のイベントを企画者が実際に立つことで、どんなことを思いながらイベントを成功させようとしているのか、こんなにも私の知らないところまで頑張っている人たちがいたのか、知ることができ、とても感激しました。」などなど。



を重視して、私たちはこのイベントを企画したともいえます。

## 大変な準備



竹あかりの主役は言うまでもなく竹灯籠ですが、この灯籠が作られるまでの経緯をお話しします。まず、全体の企画会議が4月、5月とコミセンで行われ、地域の人たちと大学のゼミの学生、先生たちが顔合わせをし、さまざまな役割の分担と日程が決められました。そのなかで竹の伐採は、夏の暑い盛り7月から9月のあいだの日曜日に合計5回行うことになりました。

早朝から昼にかけて地域の方たちの指導を受けて、荒れた竹林に入り、竹の切り出しを行いました。太い孟宗竹はチエーンソーを使って能率的に切りましたが、枝打ちはノコギリの手作業です。何回目かには雨に降られびしょ濡れになりながらの作業だったのですが、暑さ以上の苦労がありました。伐採した竹は、枝打ちのあと、コミセンに運び、後日灯籠の形にカットします。電動ノコギリをつかい行うのですが、見かけによらずこの作業がとても難しいのです。こうして灯籠が出来上がりました。1000本近く作りました。



# —編集後記—

「水球のまち柏崎」。水球について何も知識のない私ですが、この言葉は聞いたことがあります。柏崎のまちと一緒に成長してきた水泳・水球の歴史を直接、横関さんに伺うことができたのが印象深かったです。

久我 優希

今回のインタビューで、各分野で柏崎を盛り上げようとしている方々のそれまでの生き方、考え方を知ることが出来、大変勉強になりました。私も地元である柏崎が活性化するよう、これからも努力していきたいと考えています。

高橋 桃花

大学で4年間水球をし、ブルボンKZに所属していたので、「水球のまち柏崎」と呼ばれるまちで水球ができたことに感謝しています。また、インタビューなどを今まで知らなかった柏崎の水球の歴史を知ることができてよかったです。

中村 侑人

今回卒論の取材をしてみて、改めて柏崎の良さを勉強出来ました。これから社会人になり、柏崎に長くいることになるので、私もなんらかの形で、柏崎の活性化に協力していきたいと卒論を通して感じました。

増田 泰大

AO入試で「入学後、大学で学びたいこと」を述べて文化経済学科に入学しました。内容は農業で何かできないかでした。農業データの集積や自然農法、6次産業、TPP、循環型社会と思いつくまま取り上げました。「野菜によるまちづくり」で着地できたことを嬉しく思っています。

植木 敏郎

「まちづくり」に目を向けると、人は色々な分野の中、置かれた立場で一生懸命に活動をしていることが分かりました。私も、自分ができることで人が輝ける、素敵な柏崎の「まち」をつくりあげて行きたいと思います。

宮嶋 美恵子

文章を書くということは難しいことです。自分ではわかっているつもりのことでも、知らない人にわかってもらうには、それなりに整理しなければなりません。整理する過程で、実はよくわかつてなかった箇所が出てきます。もう一度自分なりに考え直さなければなりません。整理できたとして、次はどういう順番で説明するかも大切です。文章を読むということは、一気にわかるのではなく順番に読んでいく過程で少しづつわかっていくことなので、何からどう説明して理解をえるようにするか重要なのです。その他、読む人のどこに訴えるか、好奇心か感情か理屈なども大事ですし、正しい「てにをは」は言うまでもありません。こんな難しいことに、皆さんよくチャレンジしました！

梅澤 精

本号で5冊目となる『ローカレッジ』は、初の試みとして、この春新潟産業大学を卒業する「まちづくり・地方行政分野」ゼミ生たちに、4年間の学びの集大成=卒業制作として、取り組んでもらいました。このメンバーでは1年前にも『ローカレッジVol.2』を手がけていますが、その頃よりも文章もPCの操作も、様々な面で随分成長したように感じます。そして何よりも今回は、地域の方の話を聴き、そこから自分の活動や想いを振り返り、地域社会の文脈に位置づけるというプロセスを、丁寧に重ねることができたことが、一番の成果だったでしょう。地域の「生きた声」から学んだことは、今後、きっとどこかで皆さんにヒントを与え、背中を押してくれるものと思います。

権田 恭子



2016年10月下旬、史跡「飯塚邸」の庭園「秋幸苑」にて。

## 産大生と地域のかけ橋 ローカレッジ Vol.5

2017年3月18日発行

### 編集・発行責任者

新潟産業大学  
経済学部 教授 梅澤 精  
経済学部 講師 権田 恭子

※この冊子に関するご意見・ご感想をお寄せ下さい。

今後の参考にさせていただきます。

〒945-1393 柏崎市軽井川4730番地  
新潟産業大学 地域連携センター  
TEL: 0257-24-8441  
FAX: 0257-22-1300

### 編集スタッフ:

新潟産業大学経済学部  
文化経済学科4年  
梅澤・権田ゼミナール  
(まちづくり・地方行政分野)

久我 優希

高橋 桃花

中村 侑人

増田 泰大

植木 敏郎

宮嶋 美恵子

